寺院

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/41394

7. 寺院

菅 沼　多 恵

1. はじめに
2. 鵜島地区の寺院
3. 組織
4. 年中行事
5. 覚性寺の報恩講
6. 考察
7. おわりに

1. はじめに

今回の調査で訪れた宝立町鵜島地区は、山と海に囲まれた珠洲市内にあるのどかな地域であった。一週間の聞き取り調査を行った中で私が最も興味を持ったのは寺院についてである。鵜島地区には 3 つの寺院があり、それぞれの寺院がどのように地域に根付いていて、地域住民と関係を持っているのか詳しく知りたいと思った。

本章では各寺院の概要から寺の構成組織、年中行事に触れた上で、聞き取り調査をしてきて見えてきた問題点について考察していきたいと思う。

これより記述していく内容は主に 3 つの寺院の住職さん（A さん、宗玄、男性、60 歳代 ; B さん、上稲荷、男性、80 歳代 ; C さん、宗玄、男性、60 歳代）への聞き取りである事をここに述べておく。

2. 鵜島地区の寺院

宗玄町鵜島地区には、覚性寺と真浄寺と金相寺という 3 つの寺院がある。まずはこの三つの寺院の概要について記述していく。

2.1　覚性寺の概要

覚性寺は真宗大谷派の寺院である。A さんによれば覚性寺は集落では最古の寺で、過去帳が 300 年分あり少なくとも 300 年の歴史はあるそうだ。

開基当時は現在地より 2km 西の地にあり天台宗であった。文明 4（1472）年、初代住職の了西の時に浄土真宗に改宗、覚性寺と号するようになった。四代住職了海の時に道場が焼失し現在地に再建されたという（『珠洲市史 第二巻』、1978：276、277）。

現在 A さんの氏で 3 代目になる覚性寺は、もともとは「大林」氏から A さんの祖父の代（明治時代）に買ったものだそうだ。

本尊は木造阿弥陀如来立像である。鐘楼、庫裡、本堂の建立年代については不明である（『珠洲市史　第二巻』、1978：277）。ただ A さんによれば何百年前に泥棒が寺に火をつけ、その再建をするために、本堂は佐渡から笈を組んで持ってきたそうだ。本堂にはその時に笈に組んだ穴が残っている。

また覚性寺は什宝物（蓮如上人にゆかりのある品、宝物）を数多く所有している。門徒は宗玄、鵜島を中心に、金峰寺、柏原の他上戸、飯田などに広く分布している（『珠洲市史　第二巻』1978：342）。

2.2　真浄寺の概要

真浄寺は真宗本願寺派の寺院である。もとは二口の谷の奥、通称堂ヶ谷内寺基があり、天台宗であったという（『珠洲市史　第二巻』、1978：342）。B さんによれば永禄 4（1561）年の桶狭間の戦いがあった時に、今の場所に寺が建てられたそうだ。

真浄寺は永禄 5（1562）年に開基されたとされる（『石川県珠洲郡誌』、1923：492）。明治末頃まで本願寺坊官下間氏の下請けで六神丸を販売していた（『珠洲市史　第二巻』、1978：342）。

本尊は木造阿弥陀如来立像である。鐘楼、庫裡、本堂の建立年代については不明である。什宝物である実如上人画像を所有している。門徒は主に宗玄、鵜島、南黒丸に分布している（『珠洲市史第二巻』、1978：342）。

B さんによると真浄寺の庫裏は「九六間」のつくりである。この「九六間」という作りは能登の大百姓の家の典型的な造りであり、この庫裏はどこからか移動してきたものであるそうだ。

2.3　金相寺の概要

真宗大谷派の寺院である（『珠洲市史　第二巻』、1978：275）。開基は鉄円であり当初は天台宗であった。しかし三代目住職の正庭の時に現在の真宗に変わった或いは元祖を二代坊鉄円と名乗ったとも言われる。さらに妙厳寺の舎弟が宗玄方面の門徒 40 徒ほどを嬢受けて一宇を創立したなど

の説もあり、いつ真宗に変わったかは定かではない。また金相寺ができた時期であるが、慶長 19（1614）年以後に建立されたと考えられている。代々住職は密山氏であったが、明治 24（1891）年に大林氏に代わり、大正 4（1915）年に現在の B さんの氏となったとされる（『石川県珠洲郡誌』、1923：494）。

C さんによれば、この辺は昔は天台宗で、蓮如上人が吉崎の御坊に来られた後で改宗していて、真宗大谷派の寺院は珠洲に 40 ヶ所ほどあるそうだ。

本尊は木造阿弥陀如来立像で、鐘楼は明治 3（1870）年に建立、本堂は大正 15（1926）年に再建されたものである。門徒は主に宗玄、鵜島、南黒丸に分布している（『珠洲市史　第二巻』、1978：275）。

3. 組織

3.1　覚性寺の組織

覚性寺には役員会がある。代表役員は住職で、住職を補佐する責任役員は門徒を代表して 2 名選出される。また門徒全体の意見を聞いてくる総代には 3 名、門徒全体の意見を取りまとめる世話方には 7 名が選出される。

覚性寺には門徒により行われている同朋会がある。以前は「同朋婦人会」と言われる仏教婦人会であったが、人数の減少により 9 年前（2005 年頃）に男女ともに参加できる「同朋会」となった。同朋会の代表は、「坊守」と呼ばれる。同朋会費は 500 円で、年に一回 2 月上旬に総会がある。また門徒のご不幸時に、同朋会から弔辞と香典を届ける。

3.2　真浄寺の組織

真浄寺には仏教壮年会と仏教婦人会がある。仏教壮年会とは真浄寺の男性門徒の集まりである。毎月一回は集まり、住職の話を聞き、お茶を学び、お酒を飲む。また行事がある時に集まる。主な行事は寺の清掃、仏事の手伝いで、婦人会と合同で寺巡りの旅行なども行っているそうだ。役員会もあり、会長（任期 2 年）、副会長、会計、監査が 1 名ずつ、理事が 6 名で構成されている。この「理事」は鵜島（5 集落）と鵜飼の 6 つの集落から 1 名ずつ選出される。年会費は 2,000 円である。

仏教婦人会は真浄寺の女性門徒の集まりである。御命日のお茶出しや集会などが不定期で行われ、仏教壮年会と合同で行事もあるそうだ。役員会もあり会長、会計が 1 名、副会長が 2 名で構成されている。

仏教壮年会も仏教婦人会もお互いに情報を共有し、組織の垣根をこえて活動しているそうだ。

3.3 金相寺の組織

金相寺には役員会があったが、昨年暮れ（2014 年）に解散なさったそうだ。それまでにあった役員会の組織では、代表役員は住職で、住職を補佐する責任役員は坊守と門徒から選出された 1 名の合わせて 2 名、門徒総代には門徒から選出された 3 名であった。門徒から選出された責任役員と門徒総代の任期は 3 年であった。

4. 年中行事

4.1 覚性寺の年中行事

覚性寺では行事を行う際、読経よりも話法、形よりも心を重んじている。

【同朋会総会ならびに新年会】

同朋会総会ならびに新年会は、2 月下旬もしくは 3 月上旬に年度の会計報告と食事会が行われる。会計年度は 4 月～3 月である。会食費は 1,500 円であり、門徒以外の他門の方々の参加も可能である。同朋会の会員に不幸があった場合には弔辞を読んだり、香典をあげたりする。

【春の永代祠堂経法要】

春のお彼岸時期に行われる法要で、お浄土に還っていかれた亡き方々のために読経を行う。以前は 5 日間通して行われていたが、現在は基本的にはお彼岸時期の土日に行われている。門徒さんが花などを持ってきて、それらで祭壇をつくる。そこに住職が木の短冊に書いた法名がまつられる。お勤めは両日とも 14 時から始まるが、最終日のみ 12 時からお斎が行われ、14 時からお勤めが始まる。お斎では精進料理がふるまわれる。

【蓮如忌】

蓮如忌とは蓮如上人の御忌法要であり、蓮如上人にまつわる宝物があるお寺が行っている。覚性寺には蓮如上人所縁の宝物として御文、御骨、大蛇済度の石、蓮如上人御木像があり、蓮如忌の際すべての宝物は開帳される。

蓮如忌は蓮如上人の命日である 3 月 24 日に行われることがのぞましいそうだが、覚性寺では 3 月の永代祠堂経法要と日程的にかぶるので 4 月に行っている。

【お盆のお勤め】

8 月のお盆に住職が一軒一軒、門徒宅の仏壇を 6 時 30 分～10 時 30 分の間に 1 週間かけてまわってお勤めを行う。また仏壇だけではなく依頼があればお墓へもお勤めをしに行く。門徒数は 80 戸ほどで、鵜島地区の門徒だけでなく、鵜飼、上戸、飯田、松波などにも出向く。金沢、内灘、松任等の離れた地域の人は葬式や年忌等のみ家に伺うそうだ。離れた地域行く場合でも、泊まらずに日帰りで行くそうである。

【秋の永代祠堂経法要】

秋のお彼岸時期に行われる法要である。春と違うところは最終日にお斎がなく、お勤めのみである事である。

【報恩講】

11 月に行われる親鸞聖人に対する恩徳に感謝し報いるための法要のことである。報恩講は親鸞聖人の命日である 11 月 28 日近くに行われる。

報恩講に関して、鵜島地区には浄土真宗の寺が 3 ヶ寺あるので、門徒が 3 ヶ寺回れるように 3 カ寺ごと日程を変えている。

覚性寺の報恩講に関して、実際に参加した記録を第 5 節にて記述する。

4.2 真浄寺の年中行事

【御命日】

親鸞の月命日にあたる 16 日に毎月お勤めが開かれている。他の年中行事が近くにある場合にはその行事と一緒に行うこともある。

2 月 16 日には親鸞聖人の命日の他に、前住職の妻の命日の供養も行われる。門徒だけでなく近所の人たちもやってくるそうだ。この時に黒豆のおこわが作られ、参加者にふるまわれる。

【茶の間の会】

前身は平成元年（1989 年）から平成 8（1996）年に行われていた「歎異抄講座」である。かつては毎月集まっていたが、現在は不定期に行われている。本堂を使わずに茶の間で活動しているところから会の名前が付いた。主な活動は大阪から送られてくる仏教関係の小冊子について話し合いをする。

【修正会】

1 月 1 日～3 日に住職によるお勤めと法話が行われる。修正会には布教師は来ない。門徒さんも寺にきてお参りをする。3 日には庫裏で寺の者と門徒たちが一緒に「お酒と抹茶」をいただく。

【彼岸会法要】

3 月と 9 月の中頃に行われる法要である。以前は彼岸の「入り」「中日」「果て」の 3 日間行っていたが、現在はお彼岸の中日に 1 日だけ行われている。彼岸会法要では 3 色のおはぎが参加者にふるまわれる。

【蓮如忌】

浄土真宗本願寺派では、5 月 14 日を蓮如上人の命日としている。真浄寺では 5 月 16 日の月命日に合わせて行っている。

【降誕会（ごうたんえ）】

親鸞聖人の誕生日を祝うお講である。真浄寺では親鸞上人の誕生日である5月21日前後の日曜日に行っている。赤飯、筍、胡瓜、飛魚（「ベン」と言われる魚料理）の膳で参加者をもてなす。

【御堂経会法要】

8月1日から5日かけて行われる。住職がお勤め（読経）と法話をする。「中日」には「永代経」を読む。亡くなった門徒全体の追悼会である。

御堂経や報恩講などの重要な年中儀礼の際、真浄寺では「布教師」を呼ぶそうだ。3人の布教師がいて1年交代でやってくる。

【戦没者追悼法要と盂蘭盆会】

8月16日に行われる。普通の法要は50回忌で終わる。しかし門徒の中には戦没した方々もいる。そのような戦没者の方々のためにお盆のお参りと同時に戦没者追悼法要も行う。戦没者の名前を書いて貼り、法要の際に読み上げる。この戦没者追悼法要は真浄寺独自の行事である。

戦没者追悼法要と同日に盂蘭盆会を行っている。盂蘭盆会とは浄土真宗本願寺派の寺が行っている行事である。

真浄寺ではお盆の際、門徒の家で住職がお勤めをすることはない。門徒がお墓まいりをする時に住職がお墓でお勤めを行う。お墓でのお勤めはだいたい8月10日から15日頃に行う。

【報恩講】

報恩講は12月1日から5日の5日間行われる。住職のお勤め（読経）と法話が行われる。報恩講の際にも布教師が呼ばれる。布教師は一人呼ばれ、5日間で5回法話をする。

浄土真宗本願寺派では親鸞聖人の命日を太陽暦で考えるために、1月16日としている。本山では1月9日から16日に報恩講が行われる。

4.3 金相寺の年中行事

年に2回、6月の土日に永代祠堂経、11月の土日に報恩講を行っている。報恩講は、昔は7日間、その後3日間になり、現在は2日間になった。報恩講の後には「お取り越し」で門徒の家をまわってお勤めをする。蓮如忌は宝物が無いので先代のころから行っていない。お盆のお勤めは門徒さんから頼まれればお墓に行き行っているそうだ。

5. 覚性寺の報恩講

覚性寺では平成26（2014）年11月15日（土）、16日（日）　に報恩講が行われた。この章では実際に16日に参加した際の記録をまとめたものである。

スケジュール

以下は、住職の A さんから教えて頂いたスケジュールをもとに、11 月 16 日（日）は実際に、著者が参加し、観察した内容を書き加えてある。

【11 月 15 日（土）】

13：30　お内仏報恩講

14：00　お勤め

【11 月 16 日（日）】

08：30　お斎の仕込み

11：30　徐々に門徒さんがお寺に集まってくる

12：00　お斎

13：30　報恩講開始。住職による読経。「赤本」をみながら参加者も読経

13：45　休憩

13：55　再開

14：00　法話

14：30　真宗宗歌、恩徳讃を斉唱。歌い終わったらお金を集める

14：45　お菓子がふるまわれ、食べ終わった参加者から解散

お斎

この日お斎を作っていた方は13名で全員が女性であった。年に 2 回あるお斎を作る方々は鵜島地区で 2 班に分けられ、番制になっている。今回は宗玄・中鵜島の方々が当番であった。以前は地区の班ごとで料理を作っていたが、昔より人が減ったために現在では二班制がとられている。

写真 1 メニュー表に書かれている精進料理は2週間程前に半日かけて決められたそうだ。お斎の席でふるまわれる料理は、一般の家庭の食卓ではなかなか作ら

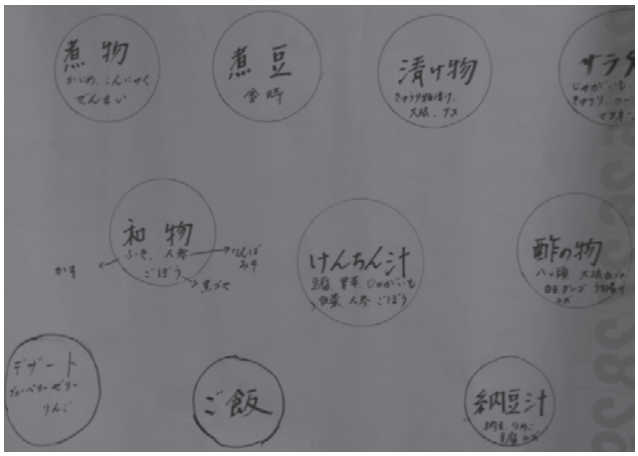


写真 1：お斎のメニュー表詳細
（2014 年 11 月 16 日　筆者撮影）

れない時間や手間のかかる料理を作るそうだ。ふるまわれる料理は50〜60人分が作られる。今回は11月14日（金）に買い出しが行われ、3日（14日〜16日）にかけて料理が作られていた。作る料理はたくさん種類があるので、料理ごとに担当者が決まっていた。お斎の開始時間が決まっているので皆さん手際よく作っていた。



写真2：当日ふるまわれた精進料理
（2014年11月16日　筆者撮影）

料理を作っている時、皆さん和気あいあいと作っており、笑いが絶えなかった。何日もかけて料理を作るのはとても大変な事ではあるが、作っている方々は世間話などをしながら楽しんで料理を作っているという印象をうけた。私はこのように地域の住民が集まり、和気あいあいと活動する機会が地域コミュニティ形成に一役かっているのではないかと思った。

お斎、お勤めに来る人数は天候によって左右され、雨の日だと参加者は少ないそうだ。また参加者のほとんどが地元の門徒の方だが、お墓はこの地域にあるが、結婚して別の地域に移り住んだ等、別の地域から来られる門徒や門徒の友人等様々な方々が来られるそうだ。

しかし近年この地域では高齢化が進み、歩いてお寺に来ることができない方が増えてきている。また報恩講のみならずお寺での行事の際、雨が降ったら車が運転できない高齢者がお寺に来ることがさらに困難になっているそうだ。このような外出の時に生じる問題は、高齢化が進む地域によくみられる。さらに高齢化という問題に「過疎」という問題が加わると事態はよりいっそう深刻になってくる。過疎化の地域ではバスや鉄道など交通インフラの衰退が進み、高齢者の外出する際に生じる問題がよりいっそう深刻となってくる。このことは、過疎・高齢化が進む地域に全般にいえる問題であると私は考える。

ある程度料理が完成してきたら、料理を作る人と配膳するする人が4対1くらいの割合で分かれて作業をしていた。盛り付けは彩りを考えながら行われていた。盛り付けされた各料理の皿は、写真2のように配膳されていた。料理はもともと写真2のように配膳位置が決まっているそうだ。あらかた料理が作り終わったら、配膳と並行して後片付けが始められた。11時30分を過ぎたあたりから、徐々にお寺にお斎に参加する方々が集まって来た。参加者にお茶を出したり、ご飯を盛

ったりするのもすべて、料理を作っていた方々が行っていた。開始時間である 12 時の段階で 20 人（うち女性 18 名、住職一家は除く）の方々が来ていたお斎は高齢者だけでなく、若い方も参加していたのが印象に残った。住職の A さんいわく、「お斎は門徒さんだけではなく、近所の方や門徒さんの友人等がお斎という行事がある事を知り、お斎に来たい人が来ている」そうだ。お斎は予定時間の 12 時に集まって一斉に食べ始めるのではなく、来た方から順番に用意され食べ始めていた。参加者の方々は一緒に来られた方や隣の席の方とおしゃべりしながら精進料理を味わっていた。

食べ終わったら報恩講に参加するために本堂へ移動する方もいれば、そのまま帰る方もいた。食べ終わった器などは料理を作っていた方々が素早く片付け、新しく来た方いたら料理をセットしていた。

準備の大変さなどの理由から報恩講などお寺の行事において、お斎をやるお寺自体が最近減ってきているそうだ。そのようななかで覚性寺ではお斎は春（3 月）の祠堂教と秋（11 月）の報恩講の時に行っている。

地域の方々が集まって和気あいあいとお話しながら料理を作ったり、大人数で食べたりする機会は大変貴重であると私は思う。このように、地域住民同士が交流し合える機会が失われつつあることは、地域コミュニティの消失の問題にかかわってくると考える。

報恩講

料理を食べ終わった方から随時本堂へ移動していた。会場である本堂には、写真 3 から分かるように畳の上に椅子が用意されていた。そして 11 月という寒い季節であるために事前にストーブが用意され会場が温まっていた。参加者の多くが高齢者ということもあり、寒さ対策としてお寺側の配慮が感じられた。



写真 3：報恩講が行われる本堂
（2014 年 11 月 16 日　筆者撮影）

報恩講が始まる前に本堂に入った入口のところの受付で一軒ずつお金が集められた。このお金は「御ろうそく料」または「灯明料」といい、内容は同じなのだがお金を入れたのし袋に「御ろうそく料」とするか「灯明料」

かは、各家によって表記が分かれるそうだ。今回受け付けは門徒総代の方が一人でおこなっていた。門徒総代は納められた「御ろうそく料」・「灯明料」を払った方のお名前とお値段を紙に書いて壁に掲示していた。掲示の仕方は受付をした順番であるそうだ。

報恩講が始まる前にはA さんの奥さんやお母さんが参加者の方に挨拶をしていた。また参加者の方々も近くの人と和気あいあいと世間話をしていた。

報恩講が始まる少し前に近所の方に報恩講が始まるという意味を込めて、副住職であるA さんの息子さんがお寺の外にある大鐘を5回たたいていた。

A さんの息子さんは普段は中能登町住んでおり、報恩講のために家族と実家である覚性寺に帰ってきていた。

外の大鐘がたたき終わり、1、2 分ほど時間をおいて、A さんがお寺の中の方に報恩講が始まるという合図で、本堂の前につるされている小さな鐘を7・5・3回でたたいていた。

予定していた時間より 30 分早い 13 時 30 分から報恩講が始まった。今回の参加者は 19 人で 18 人は女性であった。お斎の際は子どもを含め若い方が数人いたが、お勤めの参加者は高齢者が大半を占めていた。

読経の前に参加者にはお寺で用意した「赤本（真宗大谷派勤行集）」が全員に配られた。見た限りでは、参加者が持参していたのは数珠のみで数珠も持ってきた人と、持ってきていない人がいた。

A さんが前置きとして今回の報恩講の流れについて話し終わってから読経が始まった。読経の補佐は副住職であるA さんの息子さんが行っていた。読経は、A さん一人で読み始め、途中から参加者も口に出して読んでいた。読経が終わったら全員で合掌した。

今回読経で読まれたのは「正信偈」であった。「正信偈」の正式名称は「正信念仏偈」という。

休憩をはさんで法話が行われた。法話はA さんが一人で行った。写真4のように法話は黒板を使いながら行われた。

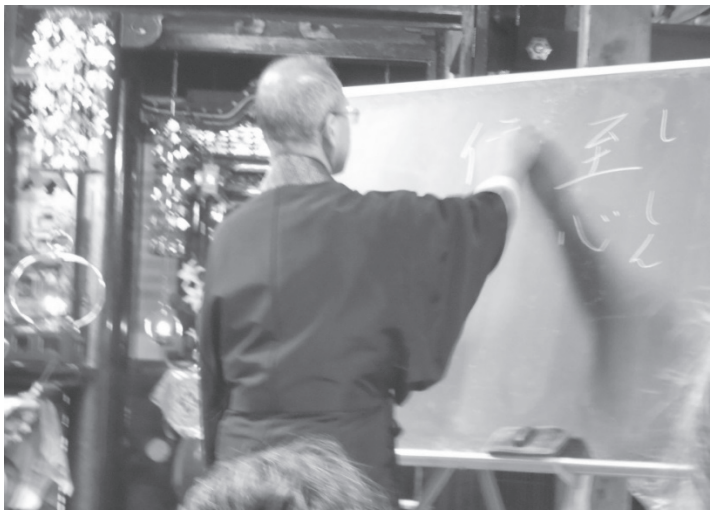


写真4：法話の様子（2014 年 11 月 16 日　筆者撮影）

今回の法話は「至心」と「信

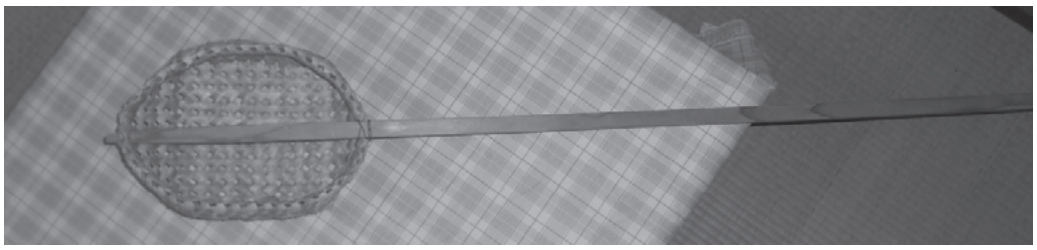


写真 5：お金を集める棒
（2014 年 11 月 16 日　筆者撮影）

楽」についてだった。至心とは仏様の真心で、仏様が我々を思う心である。信楽とは頭を下げることである。我々は煩悩持ちながら生きている。そのような中で人間が自然と頭が下がる場所は仏壇やお墓である。そしてありがとうと感謝の念を抱いた時、すみませんと反省の念を抱いた時にも自然と頭が下がる。素直な気持ちを忘れないことの大切さを、具体的なお話を交えながらだったので、法話を聞くことが初めての私でも理解しやすかった。

法話が終わった後、カセットテープから音源を流し、参加者全員で真宗宗歌、恩徳讃を斉唱した。初めて聞いたが、とても歌いやすく親しみやすい曲調であった。

歌い終わったあと、門徒総代が写真 5 の先端に網がついた棒でお金を集めていた。

報恩講終了後隣に座っていたおばあちゃんによると、「今回は男性参加者が少ないが、夏の時は男性の人もたくさん来ていた。参加者はこの地域の方が多い」そうだ。隣に座っていたこのおばあちゃんは鵜島地区の方ではなく、報恩講に参加するために鵜島地区外から来られたそうだ。

報恩講終了直後、お寺の方から、仏飯（仏様におそなえしたご飯）と奥さんが作ってくれたしょうばんとお茶がふるまわれた。仏飯は一口ずつ箸で食べ隣の方にまわした。しょうばんは 3 種類の料理が一人ずつ小皿に取り分けられて配られた。そしてこれらを食べ終わった方から順次お寺を後にして帰っていった。その際、お寺の方々は最後の一人になるまで見送られていた。

報恩講に参加する前は、固い感じなお寺の行事であると思っていたが、実際に 1 日参加してみてとても和やかな感じをうけた。お斎の料理作りの時は担当地域の門徒方々が和気あいあいと談笑しながら料理を作っていたのが印象的だった。またお斎の時、お勤めが始まる前など隣同士で世間話をしていたのが印象的だった。このように鵜島地区という大きなくくりで大勢の方々が集まれる機会は実際には少ないのではないかと思った。だからこそそれぞれの地域ごとの情報共有の場としての役割を果たしているのではないだろうか。

6. 考察

聞き取りをしていく中で覚性寺、真清寺、金相寺において共通している問題点がいくつか見え

てきた。それは過疎化や高齢化が進む地域ではどこでも考えられることである。

高齢化や過疎化が進み、鵜島地区でも無縁墓の増加や門徒の減少等様々な問題が起きていた。門徒減少によって昔のように積極的にお寺の行事が行えずまた、門徒も高齢化によってなかなかお寺の行事に参加できなくなってきているのが現状である。このことは鵜島地区全体での交流の場の減少、すなわちコミュニティの消失にもつながっていると考えられる。コミュニティの消失とは最終的には住民の孤立や伝統の継承が途絶えるなどの問題も発生してくると考えられる。

こういった状況の背景にあるのは若者の流出と無信教化があると私は考える。まず若者の流出だが、地域に働き口がないために若者は職を求めて都会へ行ってしまう。そのために過疎化や少子高齢化が顕著に表れてきていると考えられる。次に若者の無信教化だが、自分の家の宗教に関心がなく結果的に信仰がないがゆえにお墓参りなどに来なくなっているのではないかと私は考える。このような背景から無縁墓が増加していっているのではないだろうか。

7. おわりに

今回の調査においてお寺が地域に根付いていることが垣間見えた。また地域の門徒の方々もお寺の行事を通して交流し、結び付きを強めていると感じた。

最後に今回調査に協力していただいた皆様に感謝の言葉を述べさせていただきます本当にありがとうございました。